第65回 全国公立学校教頭会研究大会
第51回 東海・北陸地区公立学校教頭会研究大会
第56回 石川県公立小中学校教頭会研究大会

石川大会集録

研究主題

未来を切り拓く力を育む
魅力ある学校づくり

キーワード

〈自立・協働・創造〉

サブテーマ

『ふるさとに誇りをもち
未来を切り拓く心豊かな人づくりを目指す
これからの学校運営の推進』

令和５年
8月3日(木)・4日(金)

全国公立学校教頭会　東海・北陸地区公立学校教頭会　石川県公立小中学校教頭会

全国公立学校教頭会研究大会
石川大会（ハイブリッド大会）集録

目　　次

◇ 開催要項 …… 1
◇ 基調提案 …… 2
◇ 石川大会の趣旨・研究協議の視点 …… 3
◇ シンポジウム …… 4
◇ 記念講演 …… 6
◇ 石川大会の様子 …… 7
◇ 全国共通研究課題及び研究の視点 …… 9
◇ 分科会　提言テーマ …… 11
◇ 分科会　指導助言者・提言者・役員一覧 …… 13
◇ 分科会　研究協議
　第１分科会 …… 15
　第２分科会 …… 19
　第３分科会 …… 22
　第４分科会 …… 25
　第５分科会 …… 28
　第６分科会 …… 32
　特別分科会 …… 33
◇ 次期開催県挨拶・次期大会紹介 …… 35
◇ 石川大会を振り返って …… 36

石川県公立
小中学校教頭会

学校を示す「文」の文字に、上から白山、里山里海、前田家家紋の梅鉢紋をあしらい、調和を示す緑で、石川県公立小中学校教頭会を表わしている。

年次別にみた研究大会一覧

昭和34年度	第１回	東京都	昭和51年度	第18回	愛媛県	平成５年度	第35回	新潟県	平成22年度	第52回	北海道
昭和35年度	第２回	鳥取県	昭和52年度	第19回	山梨県	平成６年度	第36回	北海道	平成23年度	第53回	和歌山県
昭和36年度	第３回	東京都	昭和53年度	第20回	北海道	平成７年度	第37回	奈良県	平成24年度	第54回	東京都
昭和37年度	第４回	静岡県	昭和54年度	第21回	兵庫県	平成８年度	第38回	山口県	平成25年度	第55回	大分県
昭和38年度	第５回	和歌山県	昭和55年度	第22回	岡山県	平成９年度	第39回	福岡県	平成26年度	第56回	秋田県
昭和39年度	第６回	熊本県	昭和56年度	第23回	鹿児島県	平成10年度	第40回	福島県	平成27年度	第57回	静岡県
昭和40年度	第７回	東京都	昭和57年度	第24回	宮城県	平成11年度	第41回	愛知県	平成28年度	第58回	徳島県
昭和41年度	第８回	宮城県	昭和58年度	第25回	三重県	平成12年度	第42回	香川県	平成29年度	第59回	埼玉県
昭和42年度	第９回	岐阜県	昭和59年度	第26回	徳島県	平成13年度	第43回	群馬県	平成30年度	第60回	北海道
昭和43年度	第10回	香川県	昭和60年度	第27回	東京都	平成14年度	第44回	北海道	令和元年度	第61回	滋賀県
昭和44年度	第11回	新潟県	昭和61年度	第28回	北海道	平成15年度	第45回	大阪府	令和２年度	第62回	岡山県
昭和45年度	第12回	北海道	昭和62年度	第29回	京都府	平成16年度	第46回	鳥取県	令和３年度	第63回	佐賀県
昭和46年度	第13回	滋賀県	昭和63年度	第30回	島根県	平成17年度	第47回	宮崎県	令和４年度	第64回	岩手県
昭和47年度	第14回	広島県	平成元年度	第31回	長崎県	平成18年度	第48回	山形県	令和５年度	第65回	石川県
昭和48年度	第15回	沖縄県	平成２年度	第32回	青森県	平成19年度	第49回	福井県			
昭和49年度	第16回	岩手県	平成３年度	第33回	富山県	平成20年度	第50回	愛媛県			
昭和50年度	第17回	石川県	平成４年度	第34回	高知県	平成21年度	第51回	千葉県			

開催要項

主　　催　全国公立学校教頭会　東海・北陸地区公立学校教頭会　石川県公立小中学校教頭会

後　　援　文部科学省　全国都道府県教育長協議会　石川県教育委員会　金沢市教育委員会
石川県市町教育委員会連合会　石川県小中学校長会
全国連合小学校長会　全日本中学校長会　全国へき地教育研究連盟
公益社団法人日本ＰＴＡ全国協議会　石川県ＰＴＡ連合会
公益財団法人日本教育公務員弘済会石川支部　公益社団法人日本教育会

研究主題　**「未来を切り拓く力を育む　魅力ある学校づくり」**
〈全国統一研究主題　第 13 期 1 年次〉
キーワード「自立・協働・創造」
サブテーマ「ふるさとに誇りをもち
未来を切り拓く心豊かな人づくりを目指す　これからの学校運営の推進」

開催期日　令和５年８月３日（木）・４日（金）

開催方法　参集型・オンライン型を併用したハイブリッド大会

開催地　石川県金沢市

会　　場　ホテル金沢・ＡＮＡクラウンプラザホテル金沢・金沢東急ホテル・ＫＫＲホテル金沢・
ハイアットセントリック金沢・金沢市文化ホール・金沢商工会議所会館

日　　程

＊分科会ごとに開閉会時刻が異なります。

シンポジウム　テーマ「ふるさとに誇りをもち
未来を切り拓く心豊かな人づくりを目指す　これからの学校運営の推進」
コーディネーター　田村　　学　氏（國學院大學 人間開発学部初等教育学科 教授）
シンポジスト　　長谷川明子　氏（加賀屋グループ 女将）
住田　昌治　氏（学校法人湘南学園 学園長）
島谷　千春　氏（加賀市教育委員会 教育長）

記念講演　講　師　長谷川　祐子　氏（金沢 21 世紀美術館　館長）
演　題　「豊かな感性を育む場所をつくる」

未来を切り拓く力を育む
魅力ある学校づくりをめざして

全国公立学校教頭会　研究部

全国公立学校教頭会は、政策提言能力を備えた職能研修団体として、全国の副校長・教頭の専門性の向上を目指して活動を行い６５年目を迎えます。その活動の根幹のひとつが、教育の不易と流行（喫緊の課題）を見極め、全国統一の研究主題を掲げて、４０年以上にわたり、継続的・組織的に取り組んでいる研究活動です。

現在、AI や IoT、ビックデータなどの先端技術が高度化し、あらゆる産業や社会生活に取り入れられた超スマート社会 Society5.0 時代が到来しつつあります。さらに、グローバル化や人口構造の変化をはじめとして、社会経済的な課題など解決の難しい課題が山積しています。また、収束の見えない新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、「学校の新しい生活様式」に基づいた教育活動、ＧＩＧＡスクール構想による一人一台のタブレット端末の導入、テレワークやオンライン授業など学校現場にも大きな変化が起こっております。このような将来の予測が困難な時代に、志高く未来を創りだしてくために必要な資質・能力を子供たちに育むことが学校教育の喫緊の課題です。

こうした背景をふまえ、学校教育においては、「地域や社会に開かれた教育課程」を展開し、子供たちに時代の進展・変化に的確に対応する「生きる力」を身につけさせていくとともに、困難な中でも自ら積極的に未来社会を切り拓くための資質・能力を育まなければなりません。その使命を果たすために私たちは、副校長・教頭の職務内容の研究を通して力量を高め、国民の期待に応える魅力ある学校づくりに努めることが必要です。

このような社会状況の中、副校長・教頭として、何が求められ、どう対処していくか、協働してその力量を高めるべく、実践的な研究を継続的に推進してきました。研究の基本方針は、「学校教育の課題解決に努める」「副校長・教頭の職務内容や職務機能を追求する」「研究成果を政策提言に生かす」ことです。この基本方針を踏まえ、教育課題を「教育課程」「子供の発達」「教育環境整備」「組織・運営」「教職員専門性」「副校長・教頭の職務内容や職務機能」の６つの研究課題に整理し、「継続性（continuity）」、「協働性（collaboration）」、「関与性（commitment）」の３Ｃに焦点を当てて実践的研究を進めてきました。この研究は、全国大会のみならず各地区ブロック、都道府県、郡市区町村教頭会・副校長会でも、全国統一研究主題に基づき研究活動を進めております。

第１３期全国統一研究主題は、「未来を切り拓く力を育む　魅力ある学校づくり」で、キーワードは「自立・協働・創造」です。本年度は１年次になります。

今回の石川大会では、「ふるさとに誇りをもち　未来を切り拓く心豊かな人づくりを目指す　これからの学校運営の推進」がサブテーマとして設定されています。未来を予測することが困難な変化の激しい社会であっても、子供たちがふるさとのよさを認め、大切さに気付くことで、子供たち個々の土台を築き、豊かな人間性を育むことへとつながり、新しい時代を切り拓こうとする人づくりを目指すことが、魅力ある学校づくりにつながるのではないでしょうか。

最後に、この研究大会に向け、長い時間と多大な労力をかけて準備された石川大会実行委員長をはじめ実行委員会の皆様の尽力に敬意を表しますとともに、単位教頭会・副校長会、関係諸団体の皆様、所属の校長および教職員等多数の皆様のご理解ご協力があって研究大会を開催することができました。心より感謝申し上げます。

第６５回全国公立学校教頭会研究大会石川大会

サブテーマ設定の理由及び研究協議の視点について

1　大会主題「未来を切り拓く力を育む　魅力ある学校づくり」

（第 13 期　全国統一研究主題　１年次）

＜キーワード＞：自立・協働・創造

［サブテーマ］：ふるさとに誇りをもち

未来を切り拓く心豊かな人づくりを目指す　これからの学校運営の推進

2　石川大会のサブテーマ

第 13 期１年次にあたる石川大会は、第 12 期までの成果と課題を踏まえるとともに、全国統一主題にある「未来を切り拓く力」を育む学校づくりのために、副校長・教頭として果たすべく役割を追究することが重要だととらえている。

国際化や AI の活用などによる科学技術の進展、価値観やライフスタイルの多様化など、わたしたちを取り巻く社会は、急速に変化している。学校でも、GIGA スクール構想の実現によりオンライン授業や個別最適な学び等、多様な学びの局面も生み出した。一方で、コロナ禍の制限の中に成長期を過ごした子供たちは、健全に仲間とともに成長する機会が不足しており、漠然とした不安から自信不足や心を痛めている子も増えてきている。

このように、激しく変化する社会に柔軟に対応し、解決が困難な諸課題にも主体的協働的に立ち向かう心と人生を切り拓いていく力を兼ね備えた人づくりを目指し、持続可能な未来社会の担い手に必要な資質や能力を育むことは、学校教育に課された重要な課題である。

開催地である石川県は、豊かな自然、里山里海、文化、歴史や伝統などを有している。これらの「ふるさと」のよさを認め、大切さに気付くことは、子供たち個々の土台を築き、豊かな人間性を育むことへとつながる。石川県では豊かな教育資源を活用し、ふるさとを愛し誇りをもつ教育を推進している。さらに、心身ともに健やかで、心豊かな人づくりを目指すとともに、一人一人の個性や適性に応じたきめ細かな教育を推し進め、自ら学び、課題を解決する力を身に付けた、新しい時代を切り拓こうとする人づくりを目指している。

以上のことをふまえ、石川大会では、サブテーマを「ふるさとに誇りをもち　未来を切り拓く心豊かな人づくりを目指す　これからの学校運営の推進」とし、魅力ある学校を創っていくために、わたしたち副校長・教頭がどのように関与し、具現化していくか、追究していきたい。

3　石川大会研究協議の視点

⑴　「未来を切り拓く力を育む」学校教育を考える

石川大会においては、「未来を切り拓く力を育む」ことを「未来を切り拓く心豊かな人づくり」ととらえる。

これからの社会で、多様な価値観・人生観を持つ人々が互いに影響を与え合うようになることが予想され、その中で生まれる様々な課題への解決に向けては、広い視野を持ち、主体的に思考・判断・表現する力、他者と共に高め合い新たな価値を創造していく力、相手の立場や考えを理解し、敬意と思いやりを持って接することのできる豊かな心の育成が求められる。ふるさとでの学びはその基盤となるであろう。

副校長・教頭としてリーダーシップを発揮しながら「未来を切り拓く心豊かな人づくり」を進めていくために、どのような具体的な方策や取組が有効か、「継続性」「協働性」「関与性」に焦点を当てた実践研究を通して明らかにしていきたい。

⑵　「魅力ある学校づくり」を考える

石川大会においては、「魅力ある学校」を創るため、以下の要素が不可欠だと考える。

・子供たち一人一人にとって「安心・安全が保障され、必要な資質・能力が確実に身に付けられる学校」
・保護者や地域にとって「ふるさとのよさと子供たちへの願いを共有し合い、信頼し合い、協働し合いながら教育活動に取り組む学校」
・教職員一人一人にとって「働きやすく、やりがいがあり、教育活動に専念できる学校」

誰にとっても「魅力ある学校」を創っていくために、学校そのものが持続可能であることが重要である。わたしたち副校長・教頭がどのようにリーダーシップを発揮し、具体的な方策や取組を進めるか、これからの学校運営について、「継続性」「協働性」「関与性」に焦点を当てた実践研究を通して明らかにしていきたい。

テーマ

「ふるさとに誇りをもち
未来を切り拓く心豊かな人づくりを目指す　これからの学校運営の推進」

コーディネーター

田村　　学 氏

國學院大學　人間開発学部初等教育学科　教授
文部科学省視学委員

新潟県公立学校教諭、上越教育大学附属小学校教官、柏崎市教育委員会指導主事、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、文部科学省初等中等教育局視学官、平成 29 年より現職。日本生活科・総合的学習教育学会副会長、中央教育審議会架け橋特別部会臨時委員、産業構造審議会臨時委員など。主な著書「思考ツールの授業」（小学館）、「深い学び」（東洋館出版）、「深い学びを実現するカリキュラム・マネジメント」（文溪堂）、「学習評価」（東洋館）、「生活・総合資質・能力の育成と学習評価」（東洋館）、「探究モードへの挑戦」（人言洞）など。

シンポジスト

住田　昌治 氏

学校法人湘南学園　学園長

2021 年度まで横浜市立小学校校長。2022 年度より学校法人湘南学園学園長。日本持続発展教育（ESD）推進フォーラム理事、ユネスコスクールレビューアドバイザー、かながわユネスコスクールネットワーク会長、埼玉県所沢市 ESD 調査研究協議会指導者、横浜市 ESD 推進協議会委員、日本国際理解教育学会会員、持続可能な地域創造ネットワーク会員、オンラインサロン「エンパワメント」「みらい塾」講師他。著書に、新刊『できるミドルリーダーを育てる』（2022 学陽書房）『若手が育つ指示ゼロ学校づくり』（2022 明治図書）『カラフルな学校づくり』（2019 学文社）「任せるマネジメント」（2020 学陽書房）など。

シンポジスト

長谷川明子 氏

加賀屋グループ　女将

石川県七尾市和倉温泉 出身　「加賀屋」三代目社長 小田禎彦氏 長女
大学卒業後 アメリカ留学
宝石鑑定士資格取得
Ballechi&Kantor 社就職
Los Angeles ダイヤモンド卸
帰国後「加賀屋」女将補佐　中女将「あえの風女将」を経て　加賀屋グループ女将に就任　現在に至る
趣味：日舞　茶道（表千家）　長唄

シンポジスト

島谷　千春 氏

加賀市教育委員会　教育長

2005．4　文部科学省入省
（初等中等教育局、研究振興局、大臣官房総務課、国際課など）
2017．4　横浜市教育委員会　出向
2019．4　文部科学省　初等中等教育局財務課
2021．4　内閣府　科学技術・イノベーション推進事務局　参事官補佐
内閣官房　グローバル・スタートアップ・キャンパス構想推進室
2022.10　現職

「豊かな感性を育む場所をつくる」

長谷川祐子 氏

金沢 21 世紀美術館　館長
東京藝術大学名誉教授
総合地球環境学研究所客員教授

キュレーター、美術批評。
京都大学法学部卒業。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。
水戸芸術館学芸員、ホイットニー美術館客員キュレーター、世田谷美術館学芸員、金沢 21 世紀美術館学芸課長及び芸術監督、東京都現代美術館チーフキュレーター及び参事を経て、2021 年 4 月から金沢 21 世紀美術館館長。
文化庁長官表彰（2020）。

主な企画展・国際展

第 7 回イスタンブール・ビエンナーレ「エゴフーガル」（2001 年）
第 4 回上海ビエンナーレ（2002 年）
第 29 回サン・パウロ・ビエンナーレ（2010 年）
第 11 回シャルジャ・ビエンナーレ
「re-emerge, toward a new cultural cartography（リ・イマージ：新たな文化地図をもとめて）」（2013 年）
第 7 回モスクワ・ビエンナーレ「Clouds ⇄ Forest」（2017 年）
第 2 回タイランド・ビエンナーレ（2021 年）　など

主な著書

『キュレーション　知と感性を揺さぶる力』
『「なぜ？」から始める現代アート』
『破壊しに、と彼女たちは言う：柔らかに境界を横断する女性アーティストたち』
『ジャパノラマ -1970 年以降の日本の現代アート』　など

石川大会の様子

開会行事

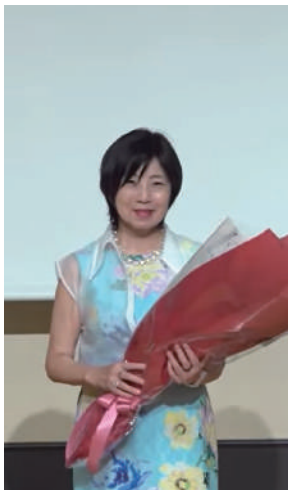
国歌斉唱

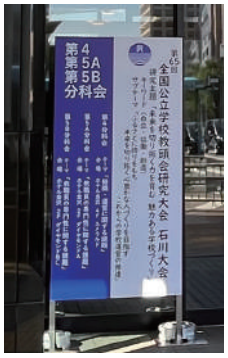
挨拶

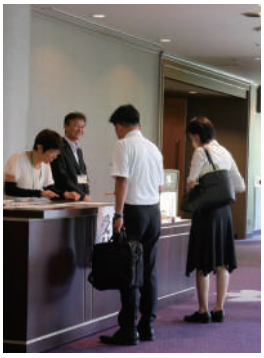
祝辞

シンポジウム

記念講演







分科会

閉会行事

次期開催挨拶

全国共通研究課題及び研究の視点

第 1 課題（第 1A 分科会・第 1B 分科会）　教育課程に関する課題

【研究の視点】

◇信頼される学校づくりに資する「社会に開かれた教育課程」の編成・実施・評価に関すること（カリキュラム・マネジメント）

◇教育目標の設定と具現化に関すること

◇教科横断的な視点に立った資質・能力に関すること

◇教育課程の実施と学習評価に関すること

◇幼・保・小・中・高・特別支援学校の連携に関すること

◇小中一貫教育に関すること

◇家庭や地域との連携及び協働に関すること

第 2 課題（第 2 分科会）　子供の発達に関する課題

【研究の視点】

◇確かな学力の確実な定着に関わること

◇児童生徒の豊かな人間性の育成に関わること

◇児童生徒の健康・体力の増進に関わること

◇生き抜く力やこれから求められる資質・能力の育成に関わること

◇その他、児童生徒の発達を支える教育課題に関わること

第 3 課題（第 3 分科会）　教育環境整備に関する課題

【研究の視点】

◇児童生徒の安心安全に関すること

◇学校の施設設備に関すること

◇学校、家庭、地域との連携と協働に関すること

◇学校規模適正化に関すること

◇文書事務、経理事務の管理に関すること

◇教育の情報化に関すること

全国共通研究課題及び研究の視点

第４課題（第４分科会）　組織・運営に関する課題

【研究の視点】

◇学校運営全般に関すること
◇人材育成や組織力向上に関すること
◇危機管理と情報管理に関すること
◇地域連携（コミュニティ・スクールなど）に関すること
◇異校種連携に関すること
◇その他、組織・運営に関すること

第５課題（第5A分科会・第5B分科会）　教職員の専門性に関する課題

【研究の視点】

◇教職員の専門家としての意識高揚に関すること
◇教職員の指導力等の育成に関すること
◇教職員の研修に関すること
◇教職員の服務に関すること
◇学校段階間連携を通した、教職員の課題意識の向上に関すること
◇教職員の協働体制の構築に関すること
◇教職員の学校運営参画意識の向上に関すること

第６課題（第６分科会）　副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題

【研究の視点】

◇チーム学校における職務内容に関すること
◇効率的な学校運営に関すること
◇教職員の働き方改革に関すること
◇教職員の支援に関すること
◇副校長・教頭候補者の育成に関すること

特別課題（特別分科会Ⅰ）　時宜に応じた課題

特別課題（特別分科会Ⅱ）　開催地の創意を生かした課題

分科会　提言テーマ

分科会	課題	提言内容・協議の柱	提言者
1A	教育課程に関する課題	**地域の特色を生かした教育活動の推進と教頭の役割** －体験活動を通したキャリア教育の充実について－ ＜協議の柱＞ 地域の特色を生かした教育活動の推進と副校長・教頭の役割 （キャリア教育の視点を織り交ぜて検討）	兵庫県 神河町立長谷小学校 藤本　　悟
		地域とともにある学校づくりを目指して －コミュニティ・スクールを基盤とした推進と教頭の関わりについて－ ＜協議の柱＞ CS を広げていくための副校長・教頭の役割とその具現化	三重県 松阪市立鎌田中学校 玉置　知子
1B		**幼保小の連携による円滑な接続のための教育課程編成** －幼保小接続推進リーダー育成事業の取組を通して－ ＜協議の柱＞ 接続カリキュラムを進めていく上での副校長・教頭の関わり方 （働き方改革の中での、幼保小連携の会の持ち方も含めて）	鳥取県 鳥取市立面影小学校 加藤　　倫
		信頼される学校づくりに資する教育課程の編成・実施・評価 －コミュニティ・スクールの推進と社会に開かれた教育課程の実現に向けて－ ＜協議の柱＞ 持続可能な教育課程の編成・実施・評価の実現に向けた副校長・教頭の関わり方	石川県 かほく市立河北台中学校 高見　茂幸
2	子供の発達に関する課題	**不登校生徒に対する支援と不登校防止対策のための体制づくり** －教員と専門スタッフ及び関係機関等との連携を通して－ ＜協議の柱＞ 関係機関・専門スタッフとの情報共有と連携のための体制づくり	香川県 高松市立男木中学校 島本　紫織
		小中一貫教育を推進する教頭の役割 －たくましく生きようとする力の育成－ ＜協議の柱＞ 未来を切り拓く力を育む　小中一貫教育を推進する副校長・教頭の役割	富山県 高岡市立福岡小学校 廉　　千明
		豊かな心を育む教育活動における教頭の関わり －幼小中連携、家庭・地域が連携した取組を通して－ ＜協議の柱＞ 幼小中（高）、家庭地域をつなぐ副校長・教頭の役割	石川県 輪島市立門前中学校 相神　淳也
3	教育環境整備に関する課題	**愛着と誇りを醸成するふるさと教育への関わり** －学校・地域・校内の連携力を高める取組を通して－ ＜協議の柱＞ 保護者・地域との連携づくりのための副校長・教頭の役割	長崎県 雲仙市立多比良小学校 小無田　貴
		生徒の主体性を育む教育環境整備と教頭の役割 －「ひと」・「もの」・「こと」の編成を中心に－ ＜協議の柱＞ 持続可能な取組となるための副校長・教頭の関わり	愛知県 名古屋市立前津中学校 前田　　豊
		子供をとりまく教育環境の整備に向けた教頭の関わり －子供の学びの生成に向けて－ ＜協議の柱＞ 安全・安心（危機管理）と副校長・教頭の関わり	石川県 珠洲市立直小学校 倉見　倫代

分科会　提言テーマ

分科会	課題	提言内容・協議の柱	提言者
4	組織・運営に関する課題	**異校種間連携を円滑に行うための効果的な教頭の関わり** －各校の実践の共有を通して－ ＜協議の柱＞ 異校種間連携を組織的・効果的に推進するための副校長・教頭の役割	北海道 美瑛町立明徳小学校 倉田　淳生
		組織力・指導力を高めるための効果的な教頭の関わり －人材育成を柱に、誰もが自己肯定感をもち、生き生きと生活できる学校づくりを目指して－ ＜協議の柱＞ 教職員一人一人の指導力・自己肯定感を高めるために、副校長・教頭としてどう関わるか	岐阜県 安八町立登龍中学校 伊藤　真理
		同僚性を育み、互いに高め合う組織づくりの実現と教頭の関わり －意図的な人材育成の見直しを通して－ ＜協議の柱＞ 人材育成の見直しを通して、組織の活性化を図るための副校長・教頭の関わり	石川県 穴水町立穴水小学校 岡本　智子
５Ａ	教職員の専門性に関する課題	**教職員個々の資質の向上、組織の専門性の向上に向けて** －「ALL KUKI 教育改革プロジェクト」の推進による教育の充実に向けて－ ＜協議の柱＞ 教員の専門性を高め、児童生徒の資質能力の向上を図るための副校長・教頭の役割	埼玉県 久喜市立菖蒲中学校 鬮間　　新
		教職員の学校運営参画意識を高める －教頭が導く、積極的に学校運営に関わる教職員の育成－ ＜協議の柱＞ 教職員の学校運営参画意識を高めていくための副校長・教頭の関わり	福井県 大野市下庄小学校 松原　大尚
５Ｂ		**教職員の専門性に関する課題の探求と解決に向けた教頭の役割** －若年層教員の効果的な育成に向けて－ ＜協議の柱＞ 教頭会のネットワークをいかした若年層の育成	宮城県 登米市立米岡小学校 平塚なおみ
		教職員の指導力を向上させる教頭の関わり －人材育成を進めるために－ ＜協議の柱＞ ＩＣＴを活用した効率的・効果的な人材育成	石川県 加賀市立山代中学校 勝木　一弘
6	副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題	**テーマ　副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題** 講　師：愛媛大学教職大学院リーダーシップ開発コース 教授　露口　健司 氏 担　当：全国公立学校教頭会 総務・調査部	
特Ⅰ	時宜に応じた課題	**テーマ　ＩＣＴ活用を踏まえた、新しい時代の学び（個別最適な学びと協働的な学び）の推進に向けた管理職の役割** ～生徒も教職員も「誰一人、取り残さない」ＧＩＧＡスクール構想の本質的な実現に向けて～ 講　師：上智大学 総合人間科学部 教授　奈須　正裕 氏 石川県加賀市 教育長　島谷　千春 氏 担　当：全国公立学校教頭会 研究部	
特Ⅱ	開催地の創意を生かした課題	**テーマ　「未来を切り拓く力を育む　魅力ある学校づくり」に向けた副校長・教頭の役割** 講演①　「教育における音楽の力」 講師：作曲家・ピアニスト・即興演奏家　北方喜旺丈 氏 講演②　「人を伸ばすメンタルコーチング」 講師：人財教育家・メンタルコーチ　飯山　晄朗 氏	

分科会　指導助言者・提言者・役員一覧

分科会	課　　題	会　　場	指導助言者		提言者	
			全公教顧問会	石川県	全　国	東海・北陸
1A	教育課程に関する課題	金沢商工会議所会館ホール	長島　和広 神奈川 横浜市立 鴨居中学校長	薮　久美子 小松教育事務所 指導課長	藤本　　悟 兵庫 神河町立 長谷小学校	玉置　知子 三重 松阪市立 鎌田中学校
1B	教育課程に関する課題	金沢市文化ホール大集会室	佐藤　　勉 福井 福井市 中藤小学校長	新谷　貴晴 石川県教育委員会 生涯学習課 課参事	加藤　　倫 鳥取 鳥取市立 面影小学校	
2	子供の発達に関する課題	ＫＫＲホテル金沢鳳凰	小島　博之 大阪 羽曳野市立 丹比小学校長	熊谷有紀子 金沢市教育委員会 教育プラザ 学校教育センター 所長	島本　紫織 香川 高松市立 男木中学校	廉　　千明 富山 高岡市立 福岡小学校
3	教育環境整備に関する課題	金沢東急ホテルボールルーム	矢ヶ部哲也 山口 防府市立 大道小学校長	石田　浩幸 白山市教育委員会 学校指導課担当課長 兼主任管理主事	小無田　貴 長崎 雲仙市立 多比良小学校	前田　　豊 愛知 名古屋市立 前津中学校
4	組織・運営に関する課題	ホテル金沢エメラルド	川上　敬吾 香川 高松市立 国分寺中学校長	亀田　香利 能美市教育委員会 学校支援課 担当課長	倉田　淳生 北海道 美瑛町立 明徳小学校	伊藤　真理 岐阜 安八町立 登龍中学校
5A	教職員の専門性に関する課題	ホテル金沢ダイヤモンドＡ	太田　康治 福岡 福岡市立 西高宮小学校長	布川かほる 中能登教育事務所 指導課長	靏間　　新 埼玉 久喜市立 菖蒲中学校	松原　大尚 福井 大野市 下庄小学校
5B	教職員の専門性に関する課題	ホテル金沢ダイヤモンドＢＣ	安田　仁昭 北海道 札幌市立 上野幌中学校長	古川　雄次 金沢市教育委員会 学校指導課 主席指導主事	平塚なおみ 宮城 登米市立 米岡小学校	
6	副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題	ＡＮＡクラウンプラザホテル金沢鳳Ａ	「副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題」 講　師：愛媛大学教職大学院リーダーシップ開発コース 教授　露口　健司 氏			
特Ⅰ	時宜に応じた課題	ＡＮＡクラウンプラザホテル金沢鳳Ｂ	「ＩＣＴ活用を踏まえた、新しい時代の学び（個別最適な学びと協働的な学び）の推進に向けた管理職の役割」 ～生徒も教職員も「誰一人、取り残さない」ＧＩＧＡスクール構想の本質的な実現に向けて～ 講　師：上智大学 総合人間科学部 教授　奈須　正裕 氏 石川県加賀市 教育長　島谷　千春 氏			
特Ⅱ	開催地の創意を生かした課題	ハイアットセントリック金沢イベントスペース	講演Ⅰ　教育における音楽の力 講　師：作曲家・ピアニスト・即興演奏家　北方喜旺丈 氏			
			講演Ⅱ　人を伸ばすメンタルコーチング 講　師：人財教育家・メンタルコーチ　飯山　晄朗 氏			

分科会　指導助言者・提言者・役員一覧

分科会	提言者 石川県	司会者	記録者	分科会運営委員 運営責任者	運営委員	運営委員 （全公教）
1A		高田　幸代 石川 小松市立 稚松小学校	中川　洋子 石川 小松市立 今江小学校	新名　　孝 石川 小松市立 安宅小学校	谷本　克典 石川 金沢市立 森山町小学校	渡邊　久人 秋田 秋田市立 勝平中学校
1B	高見　茂幸 石川 かほく市立 河北台中学校	遠田　　滋 石川 内灘町立 清湖小学校	池島　佳世 石川 津幡町立 太白台小学校	吉田　　武 石川 内灘町立 内灘中学校 ハマナス分校	河元　久美 石川 金沢市立 四十万小学校	深澤　光彦 山梨 甲府市立 南中学校
2	相神　淳也 石川 輪島市立 門前中学校	中川　知成 石川 宝達志水町立 押水第一小学校	國永　英代 石川 輪島市立 町野小学校	北　　豊 石川 宝達志水町立 宝達小学校	中村　裕一 石川 金沢市立 米丸小学校	奥田　健司 三重 松阪市立 幸小学校
3	倉見　倫代 石川 珠洲市立 直小学校	山岸　律子 石川 白山市立 光野中学校	寺井　純子 石川 珠洲市立 若山小学校	西　　有子 石川 白山市立 千代野小学校	勘村　圭一 石川 金沢市立 中村町小学校	矢谷　裕美 京都 綾部市立 上林小学校
4	岡本　智子 石川 鳳珠郡穴水町立 穴水小学校	作田　　誠 石川 能美市立 寺井小学校	堀口　香織 石川 穴水町立 穴水中学校	山先　隆正 石川 能美市立 辰口中央小学校	田渕　妙子 石川 金沢市立 馬場小学校	城島　史朗 山口 防府市立 西浦小学校
5A		福島　朋尚 石川 七尾市立 和倉小学校	佐藤　謙至 石川 七尾市立 石崎小学校	赤坂　雅治 石川 七尾市立 東湊小学校	筒井　邦治 石川 金沢市立 大野町小学校	大森　輝男 神奈川 藤沢市立 村岡中学校
5B	勝木　一弘 石川 加賀市立 山代中学校	奥原彰一郎 石川 羽咋市立 邑知中学校	吉田　亜紀 石川 加賀市立 作見小学校	杉谷　靖史 石川 羽咋市立 羽咋中学校	北脇　陽子 石川 金沢市立 長田町小学校	川上慎一郎 鹿児島 鹿児島大学教育学部 附属中学校
6		植木　文貴 群馬 みどり市立 笠懸小学校	加藤　敦寛 石川 金沢市立 鞍月小学校	米田　寛子 石川 金沢市立 伏見台小学校	武内　直子 石川 金沢市立 花園小学校	佐々木香織 茨城 牛久市立 牛久第三中学校
特Ⅰ		鎌田　哲至 北海道 札幌市立 緑丘小学校	直江　賢一 石川 金沢市立 芝原中学校	寺田　康彦 石川 金沢市立 緑中学校	大板　利行 石川 金沢市立 扇台小学校	倉金　　誠 群馬 伊勢崎市立 殖蓮第二小学校
特Ⅱ		泉　　照美 石川 金沢市立 小立野小学校	谷本　明子 石川 野々市市立 御園小学校	海野　諭美 石川 金沢市立 木曳野小学校	中田　明範 石川 金沢市立 不動寺小学校	内野　明光 埼玉 川越市立 霞ヶ関南小学校

提言①

地域の特色を生かした教育活動の推進と教頭の役割

―体験活動を通したキャリア教育の充実について―

兵庫県神崎郡小学校教頭会
神河町立長谷小学校
藤本　　悟

＜協議の柱＞

☆地域の特色を生かした教育活動の推進と副校長・教頭の役割
（キャリア教育の視点を織り交ぜて検討）

1　提言者から提案された成果と課題

・成果
　①　児童の達成感・自尊感情・自己有用感の高まり
　②　ゆとりあるプログラム編成
　③　教頭会での情報交換により目標の明確化や見直し

・課題
　①　キャリア教育の視点での基礎的・汎用的能力の育成についての位置づけが不明瞭
　②　小中の「つながり」の視点を見い出す必要
　③　地域の人的・物的資源の発見、確保、連絡調整の開発

2　グループ協議報告

・教頭が地域の人脈づくりのために地域会合に参加したり、通知を地域の家庭にもっていき、地域人脈を広げたりできる。
・幼小中の連携の大切さ、小中高も含めて何を目指しているのかの見通しをもつことが大切である。
・人とのつながりを重視して、地域で外部とのつながりで町おこしをしていて、大学と連携して大学からゲストティーチャーを呼んだり、大学にゲストを紹介してもらったりしている地域もある。
・現在は、一人１台端末を活用していてICTは有効。端末を活用して講師に話を聞いたり、学校間で山の学校が海の学校とつながって、互いに紹介し合ったりしている。ただ、体験に勝るものはないので、バランスが大切ではないか。

3　指導助言

助言①　小松教育事務所 指導課長　薮　久美子 氏

・体験活動を通したキャリア教育の充実
　県の施策をもとに、環境学習と長期宿泊体験活動を位置づけて教科横断的に取り組まれている。地域の特色や良さに気付き、高い教育効果が期待される。今後、体験活動の内容を発達段階に応じて系統的に整理するとよい。

・地域と学校との連携
　地域のニーズに合わせ、子どもにとってよりよい環境を築くために、地域との連携を構築し、深めようとしていた。地域資源を活用されており、教頭が学校と地域とのパイプ役になっているが、教頭だけではなくキャリア教育担当と連携し、校内の役割やシステムを整えることも大切。

助言②　神奈川県 横浜市立鴨居中学校
校長　長島　和広 氏

・教頭・副校長のカリキュラムマネジメント
　いかに効果的に自分の学校の教育目標に近いものを取り入れていくか。開かれた教育課程が、外部の方とのつながりをつけていくかが難しい。それを解決する方法として、CSがそうなるのではないか。

・カリキュラムオーバーロード
　大切なことは、持続可能な活動にしていくこと。担当職員がいなくなるとその事業がなくなるということはよくある。いかにその学校に根付かせるかということが大切。また、いろいろなことを盛り込みすぎず、先生方の働き方を考えていくこと。

提言②

地域とともにある学校づくりを目指して
―コミュニティ・スクールを基盤とした推進と教頭の関わりについて―

三重県松阪市公立小中学校教頭会
松阪市立鎌田中学校
玉置　知子

＜協議の柱＞

☆CSを広げていくための副校長・教頭の役割とその具現化

1　提言者から提案された成果と課題

・成果

①　教頭が学校と地域間の連絡・調整を通して連携が取りやすい関係を築くことで、CSが推進

②　教頭会で各校の取組の情報交換や意見交流をすることで、CSの理念について研修による深まり

・課題

①　校内の人材育成と組織の整理を図り、地域と協働して取組を進める体制の構築が必要

2　グループ協議報告

・教頭の仕事はつなぐこと。まずはCSが何か知ってもらい、学校にあるものを広めていくとよい。子どもたちが地域の人と関わることで、教員が地域の人を知り、子どもたちも地域を知り進めていくことに意味がある。

・教頭としての役割として大切なのは、広報。子どもたちがやったこと、学んだことを地域の前で発表したり発信したりしていく。これを継続していくことが子供の姿を通して地域と学校をつなげていく強いものになる。

・学校の課題に何ができるかを考えていただくところから始めた。そして、児童会としては、PTAとしては、大学の視点ではどんなことができるかと。その年度の中間でどこまでできたか、年度の最後に来年度ここまでしましょうとCSを使っている。

・学校の取組を伝えると、地域が請け負ってくれたり、地域から学校に困っていることはないかと聞いてくださったりつながってくれる。

3　指導助言

助言①　小松教育事務所 指導課長　薮　久美子 氏

・学校目標の共有

目的や理念を理解し、地域で連携されている。教頭が学校と地域との懸け橋になり、相互に協力し合っている。常に地域でどのような子供を育て何を実現したいかという目標に立ち返ることが大切ではないか。

・役割の明確化と連携の工夫

各校の教頭が連携し、地域に相談しやすい環境が築かれている。さらに役割を明らかにし、任せる部分は任せるとよい。

・持続可能な取組に

教頭会において、各校の取組を情報交換しているところがよい。他校の取組を知ることで、自校に生かせないかとなっている。振り返りも大切に、スクラップ＆ビルドで持続可能に。

助言②　神奈川県 横浜市立鴨居中学校
校長　長島　和広 氏

・「開かれた教育課程」を根付かせるために

地域の人も巻き込んで共有することに意味があり、いいことも、悪いことも一緒に話ができることが大切。地域とフラットな立場で話ができ、悩み事を共有できるかをポイントにしてもいいのではないか。

・「Win Winの関係」

地域の民生委員は地域のためになりたいと思っており、学校で子どもとつながるということを前向きに考えてくれる。カリキュラムオーバーロードと伝えたが、学校と地域の一線を引くことも大切で、副校長・教頭がその要となる。

提言①

幼保小の連携による円滑な接続のための教育課程編成
―幼保小接続推進リーダー育成事業の取組を通して―

鳥取県鳥取市教頭会
鳥取市立面影小学校
加藤　倫

＜協議の柱＞

☆接続カリキュラムを進めていく上での副校長・教頭の関わり方(働き方改革の中での、幼保小連携の会の持ち方も含めて)

1　提言者から提案された成果と課題

・成果

「幼保小接続推進リーダー」が中心となった取組により、リーダーの育成ができ、「接続カリキュラム」、「交流計画」等が学校全体のものに浸透してきている。

幼保小で協議して「目指す子供像」の育成に取り組んだことで、円滑な接続のためのカリキュラムづくりに統一性が見られる。また、年間計画の作成により、ねらいを共有した交流や教員同士の情報交換が計画的に行われるようになった。

・課題

教頭として、子供や職員同士の交流や体験、研修会に関するコロナ禍による制限や学校と園の情報交換の場の設定、日程調整等について難しさがあった。今後も接続可能な取組を行うための模索をしていく必要がある。

中学校区の副校長・教頭会を通して、園と学校との接続に関する情報を共有し、中学校卒業までの15年間を見渡した子供の育成に関わる成果と課題を共有しながら取組をしていく必要がある。

2　グループ協議報告

・職員同士の交流や勉強会を位置付け、計画に取り組んでいることがとても参考になった。
・持続可能な取組になるように、効果の有無について検討していく必要がある。
・幼保小連携の年間計画の作成や幼保小の活動等、負担に感じる教員も多いが、そうならないよう、４月段階で年間計画を提案し教員に見通しをもたせたり、オンラインでの交流を図ったりするなど、負担感なく取り組める工夫が必要である。
・幼保小連携は、他校種の交流ができることで、児童理解が深まり、有効である。
・教頭として、負担感なく実施できることを念頭に、教員同士の交流を支え、推進リーダーを育てていくことが大切である。

3　指導助言

助言①　石川県教育委員会 生涯学習課
課参事　新谷　貴晴 氏

・「目指す子供像」に向けて、合同で年間計画を策定しているのが素晴らしい。年間計画を可視化することで持続可能になっている。幼保小中の15年間という連携体制が充実している。
・教頭として、情報の共有を図るとともに、助言、協議、活動の振り返りを行い、よりよい連携ができるように、働き方も含めて検討していくことが大切である。

助言②　福井県 福井市中藤小学校
校長　佐藤　勉 氏

・今の子どもの姿、現状をしっかり把握しており、幼保小中の接続がきちんとされている。
・それぞれの校種で「めざすゴール」が明確で、共有されている。人が協働的になるのは、するべきことが明確であるという、安心感とやすらぎが必要である。
・交流等によって、子ども達が育つ場が設定されている。交流による体験で人間力が育ち、自己有用感が育つ。ただ、新たな活動をする場合は、何か一つ活動をなくす等、負担なく続けていけるようにすることが必要である。

提言②

信頼される学校づくりに資する教育課程の編成・実施・評価
―コミュニティ・スクールの推進と社会に開かれた教育課程の実現に向けて―

石川県河北郡市教頭会
かほく市立河北台中学校
高見　茂幸

＜協議の柱＞

☆接続可能な教育課程の編成・実施・評価の実現に向けた副校長・教頭の関わり方

1　提言者から提案された成果と課題

・成果

子どもを中心に据えた学校と地域の連携は、地域の活力の向上につながる。連携の要である教頭の役割は重要であり、地域との協働体制を整備すると同時に、組織的な学校体制を構築する必要がある。学校の様々な行事や活動に対して、地域の協力と支援のおかげで、生徒たちは多くの体験をすることができる。携わってくださる地域の方々から「中学生と関わることができて楽しい。」「自分のしてきたことが役に立ってうれしい。」という感想をいただくことが多い。生徒たちも活動を通じて、地域の方から新しい気付きや学びを得ている。これらの活動を通して、中学生の地域に対する愛着が深まっていると考えている。子どもだけでなく、大人の学びも深まり、学校も地域も活性化できることがコミュニティ・スクールの成果であると考える。

・課題

これまでの活動の成果を土台として、コミュニティ・スクールの次なる方向性を検討する必要がある。学校教育の充実に加え、社会教育団体の活動、更なる地域の活性化、地域の教育力の向上を図る事業展開をしていきたいと考える。学校の実態や地域の特色を生かした授業や学習支援、学校行事等を工夫・実践し、地域住民や保護者と協力して「ふるさとに愛着と誇りを持ち、人と地域を愛する生徒の育成」を目指すとともに、より効果的な学習、持続可能な活動を推進していきたい。

2　グループ協議報告

・活動を振り返り、教頭として、活動ありきにならないように助言、調整することが大切である。
・スタッフが変わっても、体制が整っていることが一番である。
・持続可能な活動になるように、教頭として、地域コーディネーターを育てることが大切である。

3　指導助言

助言①　石川県教育委員会 生涯学習課
課参事　新谷　貴晴 氏

・地域と学校の橋渡し役として活動する学校コーディネーターは、社会に開かれた教育課程の実現に向けて心強い存在となっている。
・人、もの、ことを活用した地域をフィールドとした活動は、地域社会との深まりがある。
・縦軸(学年に応じた系統的な学びのテーマ)と横軸(各教科等の連動)を意識した教科横断的指導ができている。
・地域住民や保護者との対話・熟議の場を大切にすることで人とつながり、地域の活性化にもつながる。
・学校教育と社会教育をつなげることで、持続可能な地域づくりができる。

助言②　福井県 福井市中藤小学校
校長　佐藤　　勉 氏

・学校という場が、未来を捉える場になっている。
・学校評価を自己評価ではなく、他者評価を行っていることで、地域とのつながりを感じる。
・地域の人と関わることで、コミュニケーション力が育つ。
・活動することで気付きが生まれ、考え実行しようとする力が育つ。
・地域を知ることで好きな気持ちが生まれ、好きだからこそ改善点が見えてくる。そして、それが、課題意識となり、次の学びへとつながっていく。

提言①

不登校生徒に対する支援と不登校防止対策のための体制づくり
―教員と専門スタッフ及び関係機関等との連携を通して―

香川県高松地区教頭会
高松市立男木中学校
島本　紫織

＜協議の柱＞

☆関係機関・専門スタッフとの情報共有と連携のための体制づくり

1　提言者から提案された成果と課題

・成果

校内外の人的資源との連携の確立、SC・SSWや外部機関と円滑につなぐことで好転した例が多かった。また、不登校生徒の課題に気づくことができ、情報共有・対応について支援が円滑にできた。教頭のコーディネートによるものである。

・課題

教頭がハブの役割となっているが、対応に多くの時間が割かれる。情報集約の機能は維持しつつ、役割分担の再編成が必要である。また、不登校支援生徒への対応策について週１回では十分な協議が行えないため、ケース会の確保、スーパーバイザーの存在等も必要となっている。

2　グループ協議報告

・相談室利用の手続きをスムーズにすることで、困り感に即対応する体制を作れるのではないか、との意見があった。
・SC・SSWの勤務状況の情報交報をし、もっと多く配置してほしいという声があった。別室登校の教室対応は、空き時間の教員か、支援員か話題になり、専属の教員配置が増えている。
・アバターの先生、生徒、等活用例があり、今後探っていく。
・学校規模は小規模から大規模と様々であるが、各学校の課題は情報共有することである。いかに細部まで共有し、継続的に長期にわたって共有化していくかが大事である。
・地域・学校規模によって、体制の差があるが、定期開催する情報共有の場を作っていくことが必要である。
・外部・内部との連携を教頭が進めることが役割である。ICT機器を活用して情報収集、情報共有していくといい。不登校をなくすというより、居場所づくり・子どもの学習保障を考えていくことが必要である。

3　指導助言

助言①　金沢市教育委員会 教育プラザ
学校教育センター所長　熊谷有紀子 氏

・不登校対策を柱に、組織的に職員が働く好事例である。PTAとの連携でボランティア参加例は、不登校だけでなく全生徒に有効である。
・校内研修(ワークショップ型)が効果的で、校内で短時間でも研修を増やしていく取組をしていくとさらによい。
・文科省「COCOLOプラン」(R5.3.31)にアクセスし、不登校対応の全体像が見えてくる。個別の対応や、自分の未来をイメージさせることが必要である。

助言②　大阪府 羽曳野市立丹比小学校
校長　小島　博之 氏

・学校規模、自治体、予算、SC・SSW等の人的配置等の違いがあり、全国一律に共通のテーマで話し合うことは難しい。教頭が核となりつつもSC・SSW、児童生徒支援コーディネーター、通級指導等の担当に偏りがないように役割分担が必要である。
・学校として、どうすればその子にとってよりよいものになっていくか、どこで学ぶかの場を作り、取組を続けていくと、必ず良い方向に流れていく。教頭は道案内役をする。

提言②

小中一貫教育を推進する教頭の役割

―たくましく生きようとする力の育成―

富山県高岡市小学校教頭会
高岡市立福岡小学校
廉　　千明

＜協議の柱＞

☆未来を切り拓く力を育む　小中一貫教育を推進する副校長・教頭の役割

1　提言者から提案された成果と課題

・成果

中学校区ごとの取組を共有することで、自校区での取組に生かし、教頭の資質向上につながった。教頭が小中で連絡を取り合いながら情報整理、調整を行うことが重要である。中学生は教えることで自信をもち、小学生は中学入学前に抱いていた不安が減った。

・課題

継続的に連携を深めていく組織作りをしながら自身の資質向上を図る必要がある。校長、教職員、家庭や地域の願いをくみとり、密な連携を計りながら、進めていくことが必要である。

2　グループ協議報告

・継続的な組織作り、ミドルリーダーの育成、ICTの活用、保護者・地域との連携の話題が出た。
・交流授業や出前授業の日程調整は担当に任せて、教頭としては、全体の流れを把握することをしている。
・コロナ禍で今までやっていたことができなかったが、ICTも活用しながら教頭間で情報交流していくことが大事である。
・小中一貫教育はコロナ禍であっても、地域で育てていくという意識で、つながりを欠かさないように取組を行った学校がある。
・義務教育学校の例では、小1にとってお手本となる中3の姿が目の前にあることが利点である。
・教頭の役割は調整すること、担っていく人材をどう育成していくかということ。任せていくことが人材育成につながるのではないか。教頭は行先案内人役で、見守ることが必要である。
・恵庭市の例では、様々な委員会を学校間で設置(学力向上委員会、生徒指導委員会、特別支援委員会等)、年3回開催し、若手、ミドルリーダーに対し教頭が後ろ盾になっている。
・学校規模に応じた小中連携をしていく。教頭と校長がまず小中連携の意図・意味を確認し、先生方におろしていく。連携の目的・魅力は何かを明確に持つことが大事である。

3　指導助言

助言①　金沢市教育委員会 教育プラザ
学校教育センター所長　熊谷有紀子 氏

・子どもの実態に合わせた、教頭のコーディネート力がすばらしい。先生方が「やってよかった」と、実感でき、納得感が人を成長させる取組である。
・人材育成は、誰にどの仕事を任せるかの見極めが大事である。
・特別支援や不登校の面でも9年間で育てる思いで取り組み、特に高学年と中1で切れずにつながっていく支援が子どもの安心感につながる。

助言②　大阪府 羽曳野市立丹比小学校
校長　小島　博之 氏

・義務教育学校は、小・中一緒に過ごして活動が見えやすいが活動の目的は何か(あこがれや自己有用感など)、納得感のある取組をするといい。
・小学校教科担任制が導入される中、中学校免許の先生は専門性を活かしながら発達段階に応じて教育課程があること、学びの順番を考慮せねばならない。小中連携する上で、異校種の互いの思いを出し合って知ってもらい、距離感を縮めていくことが大事である。

提言③

豊かな心を育む教育活動における教頭の関わり

―幼小中連携、家庭・地域が連携した取組を通して―

石川県輪島市教頭会
輪島市立門前中学校
相神　淳也

＜協議の柱＞

☆幼小中(高)、家庭地域をつなぐ副校長・教頭の役割

1　提言者から提案された成果と課題

・成果

職員同士の連携、先を見通した指導で、小学６年生の中学入学前の不安が減り、児童生徒の自信や意欲向上が見られたとともに、職員の意識の変化にもつながってきた。教頭同士が連携し、課題を焦点化して主任層に働きかけた成果といえる。

・課題

学校規模で動きやすさの違いがある。主任層へ任せることが必要だが、連携の時間と場所をどう確保するか、また、会の運営･進行を教頭がファシリテートする力が必要である。

2　グループ協議報告

・子ども同士のつながりについて、地域コミュニティの中で、小中一緒に登下校したり、避難所開設に中学生が参加したりする例や、人間関係づくりプログラム冊子を配布・活用する例が挙げられた。子どもたちのために何をどうつなぐか考えることが必要である。

・高校との連携は、高校存続問題があり、中高一貫教育にすると勉強をしなくなる傾向や、部活で特色を出すと偏りが出てくる実態がある。小学校に高校生が体育を教えに来る好事例もあり、子どもたちのために何ができるかを考える事が大事である。

・PTA・地域とのつながりは、地域が小さければ小さいほど関係が密となり、土日の行事参加と働き方改革のバランスが課題である。コロナ禍から元に戻すのではく、持続可能なシステムを作り上げることが大事である。

・家庭地域をつなぐ地域コーディネーターをどのように選出するか、人選が大事である。

・PTAが任意団体であるため、入会しないPもいる中、「PTO」(Oは応援団)として活動する例が挙げられた。他に地域団体「おやじの会」やボランティア組織などがあり、教頭は理念、危機管理、人選を確認して窓口になる必要がある。

3　指導助言

助言①　金沢市教育委員会 教育プラザ
学校教育センター所長　熊谷有紀子 氏

・小中連携活動で、中学入学にスムーズにつなぐ取組により、子どもたちの自信や先生方の変化が表れていてよい。今後、役割を主任層に任せていくことが大事だが、報告する毎に言葉やニュアンスが変化することも含めて聴く必要もある。

・教頭は子ども対応･保護者対応とも大変であるが、相手の世界に重ねつつ自分の世界を保って、接していってほしい。

助言②　大阪府 羽曳野市立丹比小学校
校長　小島　博之 氏

・地域性の差があり、課題も違うから、必要なものが違っていて守備範囲が広い発表である。学校の力だけでは足らない所を、コロナ禍を経て、何を残し何を復活させるのかを見極めて、外部連携の持続可能な形を探っていくことが必要である。

・子どもが起きている時間の半分を学校が預かっている意識を持ち、安心・安全な学校を作っていく為に、多忙であるが一旦手を止め、顔を見て相談を受けられるように努めていかねばならない。

提言①

愛着と誇りを醸成する ふるさと教育への関わり

―学校・地域・校内の連携力を高める取組を通して―

長崎県雲仙市教頭会
雲仙市立多比良小学校
小無田　貴

＜協議の柱＞

☆保護者・地域との連携づくりのための副校長・教頭の役割

1　提言者から提案された成果と課題

・成果

学校運営調査の結果では、児童生徒のふるさとへの意識が高まっていることが分かるなど、ふるさとに対する興味関心を一層高めることができた。さらに、ふるさと教育を実施することで、地域、児童、教職員の繋がりが深まり信頼関係を強めることができた。また、教職員が総合的な学習と他教科をつなげ横断的な学習を展開することができた。

・課題

コロナ禍のため、簡素化や時間短縮を図る中での教育活動の充実に苦心した。今後も感染症対策と教育活動の工夫が必要である。また、地域や外部機関の思いと学習のねらいとの整合性を図る必要がある。さらに、人的・物的資源についての情報を整備し、持続可能なふるさと教育にしていかなければならない。

2　グループ協議報告

・毎年度の人事異動により地域のよさが教員に受け継がれないことが課題である。地域のよさを知るためには、教員の地域探検や、児童の地域学習が必要である。教頭として、地域のひと・もの・ことを明記した一覧表の作成で、持続可能な学習となるようにした。

・地域学習を進める中で、地域によって実情がさまざまである。地域に関する研修が多いとメリットもデメリットもある。また、高齢化によるコミュニティの人員減少や、働き方とのバランスが課題である。共に活動してくれる関係者の存在が大切である。

・人口減が進む中、ふるさと教育は大切である。地域交流は、地域コーディネーターを活用したり、担任にも一役を担わせたりして、地域交流のメリットについて考えながら進める必要がある。一方で学校と地域の活動を区別していくことは難しく、休日や夜の活動は、管理職が担わなければならない部分がある。

3　指導助言

助言①　白山市教育委員会
学校指導課担当課長兼主任管理主事　石田　浩幸 氏

・地域学習は地域と職員、職員同士をつなげ、学校につながりを生む。信頼関係が深まれば、学校を休む先生も減る。地域への愛着と誇りを醸成することにつながる。

・働き方改革の視点で地域学習を見ると、教頭が保護者と地域とのつながりを一手に担っていくことは無理がある。まずは、教頭がつながることになると思うが、地域コーディネーター等に任せる部分は任せ、地域の人に子どもを育ててもらうことも考える必要がある。

助言②　山口県 防府市立大道小学校
校長　矢ヶ部哲也 氏

・ふるさと教育の推進はとても大切である。ふるさとに愛着を持つということは、自分たちの学校・地域を誇りに思うことにつながる。ふるさと教育の教育課程の編成はとても難しいが、コロナ禍を経た今、コロナ前に戻すのではなく改革を図ることが大切である。また、カリキュラムの「見える化」により、地域・保護者に知ってもらったり、教員は進捗状況を確認できたりする。

・持続可能な取組にするために、コミュニティ・スクールや地域コーディネーターを活用する。それが、教員の異動による影響を減らすことにもなる。

提言②

生徒の主体性を育む教育環境整備と教頭の役割

—「ひと」・「もの」・「こと」の編成を中心に—

愛知県名古屋市教頭会
名古屋市立前津中学校
前田　豊

＜協議の柱＞

☆持続可能な取り組みとなるための副校長・教頭の関わり

1　提言者から提案された成果と課題

・成果

検討会を授業時間内に位置付けたことで、職員の働き方の改革にも寄与し、情報や課題の共有、今後の検討など高い質を保って行うことができた。

ICT機器活用のスキルを現職教育で身につけたことで、生徒一人一人が主体的に学ぶために必要な環境が何かを考えながら取り組むことができている。

・課題

プロジェクトが終わった後にも、持続可能な教育プログラムを作り上げることが必要である。また、生徒一人一人の主体的な学びを促すためのツールの１つとしてのICT環境整備と教職員の研修の場が必要である。

2　グループ協議報告

・教頭は、地域と教職員、校長と教職員などの人と人の間に立ち調整する役割である。役割として、人材育成、ICT機器の活用力の習得、人材確保の実現、教師の魅力を発信すること等がある。
・持続可能な取組になるためには、９か年を見通したカリキュラム作りをすることが必要であり、全体に目を向けながら、ひと・もの・ことをコーディネートし、一覧表を作成することも大切である。
・持続可能な教育プログラム作りを整備する。コロナ禍で、オンラインやICT活用が進んだ。その取組を蓄積していく。
・幼保小や小中の連携では、重点項目を共有することで負担を減らすことができる。新しいことを始めるほど、負担も増えるので、減らすことも必要である。
・企業の助成を受けPCルームを再利用して、情報発信の部屋を作成した事例が紹介された。また、職場体験では、市教委がまとめてコーディネートすることで学校の負担を減らした取組や、メールシステムを利用することでペーパレスと教員の負担軽減になった事例が紹介された。

3　指導助言

助言①　白山市教育委員会
学校指導課担当課長兼主任管理主事　石田　浩幸 氏

・「もの消費」から「こと消費」へと現代は変わってきている。生徒が「こと消費」について考えるという機会は、精神的な豊かさについて考える機会になっている。将来、金融教育、消費者教育との連携が期待できる。
・取組の柱、カリキュラムマネージメントの柱がしっかりあることで、より広げたり工夫したりできる。教員が面白い活動内容であれば子どもも面白いと感じる。そのことが不登校対策にもつながればと願う。

助言②　山口県 防府市立大道小学校
校長　矢ヶ部哲也 氏

・持続可能な環境整備のために、コミュニティ・スクールの活用が必要である。地域の中の課題を「自分たちの願い」として地域と一緒に考える。
・ICT環境を整備するためには、教師も子どももいろいろな場面でタブレットを使う場面を設定して、慣れさせ、抵抗感をなくすことが大切である。また、できることをまず行い、解消していくことが大切である。
・９年間を見据えた小中連携カリキュラム作成に当たっては、コミュニティ・スクールを活用し、地域の人達にも知ってもらい、関わってもらう。

提言③

子供をとりまく教育環境の整備に向けた教頭の関わり
―子供の学びの生成に向けて―

石川県珠洲市教頭会
珠洲市立直小学校
倉見　倫代

＜協議の柱＞
☆安全・安心(危機管理)と副校長・教頭の関わり

1　提言者から提案された成果と課題

・成果
　研究モデルを作成し実践を考察することで、教頭は子供の学びの生成を見据えたリーダーであり、媒介者であることが浮かび上がってきた。

・課題
　小規模校という特徴から、教頭自らも実践者となるため、業務の複雑化・多様化・多量化が懸念されるため、解決策も視野に入れて研究を進めなければならない。

2　グループ協議報告

・危機管理マニュアルは年度当初や夏季休業中での見直しや、実際に動けるか検討することが必要である。また、未然防止の視点を取り入れたり、具体的な事例の情報交換をしたりすることも大事である。
・危機管理マニュアルは分厚くて使いにくい。ワンペーパー化、フローチャート化などの取組の工夫が必要である。また、危機管理マニュアルと防災マニュアルの使い分けをし、その土地にあったマニュアルを作成する必要がある。
・110・119通報を現場から即座に行う事態もあるので、職員で共通理解を図っておくことが必要である。また、防災の観点として警察や消防等とのつながりも大切である。さらに生徒の目から見た安全点検等、生徒からの情報収集も必要である。
・避難訓練時の水平・垂直避難の取組や、学校が避難所になった場合の課題等が話された。また、校内の安全点検の取組として、子供の安全点検の実施についての事例が紹介された。
・最近は特に災害への対策の必要感が感じられるようになってきたが、地域の人材不足や防犯についても課題がみられる。

3　指導助言

助言①　白山市教育委員会
学校指導課担当課長兼主任管理主事　石田　浩幸 氏

・学校共同事務・学校事務の共同実施等の取組や学校魅力化フォーラムでの取組事例を参考に教頭職への汎用を図り、異動により構成人員が変化しても困らない組織づくりに向け、仕事を割り振ることができれば、働き方の改革にもつながるのではないか。
・保護者や地域の方と話をしてみると、学校と十分な話し合いがされていないために、理解されていないと感じることがある。ワンペーパーの危機管理対策は保護者との共通理解を図るツールになるのではないか。

助言②　山口県 防府市立大道小学校
校長　矢ヶ部哲也 氏

・ヘリコプターモデルの活用は、イメージしやすく、共有しやすい。イメージを共有することは共通理解につながりやすい。地域との関わりをマネジメントすることは、取組を持続可能化することにつながる。
・何か起こった際に実働するための危機管理の柱は以下の７点である。
　①危機管理マニュアルの共有化、②避難訓練(ブラインド等)、③小中合同での訓練、④地域の関係機関との合同訓練、⑤安全点検(「子供から目線」も必要)、⑥日常的な確認、⑦情報収集
・教頭の業務の多様化の解決方法として①ICT活用、②コミュニティ・スクールの活用、③学校運営システムの改革があげられる。管理職として「見取り」と「価値付け」が必要となる。

提言①

異校種間連携を円滑に行うための効果的な教頭の関わり
―各校の実践の共有を通して―

北海道上川管内教頭会
美瑛町立明徳小学校
倉田　淳生

＜協議の柱＞
☆異業種間連携を組織的・効果的に推進するための副校長・教頭の役割

1　提言者から提案された成果と課題

・成果
　教職員がボトムアップで連携に向けた具体策を交流し、必要感を持って、異校種間連携に主体的に参加できる組織づくりを行うことができた。また教頭が問題意識をもち、各校の取組を共有し研究の深化につなげることができた。さらに、教頭の関わりチェックリストの作成により、研究を具体化させることができた。

・課題
　「活力ある学校づくり」は学校だけで行うのではなく、家庭・地域・行政と連携して進める必要がある。またICTを活用するなど、職員間の連携を深め、学校運営参画意識を向上させることが必要である。「活力ある学校」にするため、学校種が変わっても個の学びの記録を継続して活用できるような実践をしていくことが必要である。

2　グループ協議報告

・地域学校規模によってそれぞれの取組を行っている。連携には、学校、地域によって温度差があり、どんな部会をつくり、その部会で若い先生をどのように支えるかが同様に課題である。連携の組織づくりをより進めることで効果はさらに上がるのではないか。
・幼小中、子どもの姿で目指す姿が共有されていることがよい。
・コロナ禍で小中連携ができていない。連携の大切さはわかっているが、働き方改革との兼ね合いもあり、難しい現状がある。
・目的意識や必要感を持たせていくのが教頭の役割である。また５教科だけでなく、総合などの連携も大切である。

3　指導助言

助言①　能美市教育委員会 学校支援課
担当課長　亀田　香利 氏

・学校の統廃合は北海道が多く、本研究は、人口減少や社会の課題を捉えた研究である。
　連携を進めるために大切なことは、対話に対話を重ねることである。また教員の当事者意識を高めるために、委ねることも大切である。チェックリストの意義は、もれを防ぎ、作業を効率化するなど多々ある。完全性を求めるのではなく、アジャイルに見直しを図り改善していくとよい。

助言②　香川県 高松市立国分寺中学校
校長　川上　敬吾 氏

・連携には、物理的距離と意識的距離が課題となってくる。特に意識的距離を縮めるのは、何より対話である。どういう必要性があるのかなということを、教頭先生方と学校の先生方が対話することである。やはり直接、顔を合わせ伝える。それができないときはオンラインで一対一をたくさん行う。複数回繰り返しやる。連携が進むと、スムーズな取組が期待される。

提言②

組織力・指導力を高めるための効果的な教頭の関わり

―人材育成を柱に誰もが自己肯定感をもち、生き生きと生活できる学校づくりを目指して―

岐阜県安八郡管内教頭会
安八町立登龍中学校
伊藤　真理

＜協議の柱＞

☆教職員一人一人の指導力・自己肯定感を高めるために、副校長・教頭としてどう関わるか

1　提言者から提案された成果と課題

・成果

若手教員の育成をすることで、学校経営が円滑化し、結果的に全職員の意識改革とスキルアップができた。コロナ禍による業務のスリム化が推進され、元に戻すのではなく、よりよい活動になった。また、教頭会では実態を共有し課題を明確化したことで、自校にあった取組へと進化させることができた。

・課題

コロナ禍で教科の専門性を向上させる議論の場が減った。日常の授業の中から学び合える方法を共有したり、教頭がつなぎ役となって他校から学ぶことができるようにしたりしていく必要がある。また、PTAや学校運営協議会との連携を密にし、教頭が情報を発信し、課題を共有しながら進めることも大切である。

1人職・専門職・新業務でも自信をもって職務を遂行できるよう、郡内町内の部会の充実に向けた教育委員会や校長会への働きかけも必要である。

2　グループ協議報告

・指導力を高めるために必要なことは、対話することであり、環境整備、特に心理的安全が大切である。風通しよく誰とでも対話できる環境が大切である。初任者には3人体制で臨んでいる県もある。
・人材育成について、メンターメンティ制度がある県もある。ベテランへのICT活用の支援によって、若手の自己肯定感の育成につながっていった。
・授業改善では、校内で一連の流れのマニュアルがあることでベテランと若手が同じ土俵で対話ができる。業務改善では、教頭として、時間をやりくりして生み出したり、校内巡視でよいところを見つけたり、言いたいことをやわらかく間接的に伝えたりするなど、工夫している。
・教職員一人一人の強みや悩みを知り、自己肯定感や有用感を高め続ける教職員にしていくために、先生方一人一人に寄り添い安心して学べるようにしていくのが教頭の役割である。

3　指導助言

助言①　能美市教育委員会 学校支援課
担当課長　亀田　香利 氏

・自己肯定感が低い児童生徒が多いが、大人も同様かもしれない。自己肯定感を高めるためのさまざまな取組に関する研究だった。生徒指導提要の4つの視点を今一度見直し、児童生徒だけでなく、教員自身が自信を持つことは大切である。コロナ後にいろいろな取組が戻ってきているが、スクラップで見直しを図ることも大切である。

助言②　香川県 高松市立国分寺中学校
校長　川上　敬吾 氏

・学校の重要なミッションは、子どもを笑顔で家庭に帰すこと、先生方を元気な姿で家庭に帰すことであると考える。先生方の自己肯定感や有用感が子どもの笑顔につながる。互いに学び合う、教頭会全体で学び合うなど、さまざまな学びの場が工夫されていた。

提言③

同僚性を育み、互いに高め合う組織づくりの実現と教頭の関わり

―意図的な人材育成の見直しを通して―

石川県鳳珠郡教頭会
穴水町立穴水小学校
岡本　智子

＜協議の柱＞

☆人材育成の見直しを通して、組織の活性化を図るための副校長・教頭の関わり

1　提言者から提案された成果と課題

・成果

人材育成の見直しという視点で、教頭会で様々な諸課題に対して協議し意見交換する中で、自校での実践および課題改善につなげることができた。教頭がコーディネートしていくことで、「つなぐ」役割の重要性に気づき、さらに学校全体で人材育成をしていく意識が高まった。また、人材育成の見直しは、研究の充実やICT活用など、業務改善にも活用できる。

・課題

さらに同僚性を高めていくためには、「つなぐ」だけでなく、教職員集団が主体的に組織運営に参画していく意識の醸成やその仕組みづくりが必要である。

2　グループ協議報告

・組織の活性化のためには、全職員の情報の共有化が大切である。その中で研究活動において、若手はプレゼンや発表が上手で、それを前面に出すとよい。またアイスブレイキングや雑談など、人と人の対話が大切である。

・組織の活性化のために、ベクトルがそろうことが大切である。気づきが与えられるように、隙間を埋められるようにすることが大切。若手は守備範囲がせまいのでいかに広げられるか、また継続性が大切である。

・組織活性化のために、対話・コミュニケーションが大切、そして教頭が笑顔でいることが職員の活性化につながる。

・ミドルリーダーを育てることは大切である。若手を抜擢しフォローしていく。またベテランの活用も大切である。育成指標を示しながら、意識してもらう場を設ける。

3　指導助言

助言①　能美市教育委員会 学校支援課
担当課長　亀田　香利 氏

・人口減少社会の課題を捉えた研究である。組織の活性化のポイントは３つ。①見える化②対話③ポジティブな未来を描く。また、チームが成功する共通点として、心理的安全性(否定されない安全性)が挙げられている。教頭として１対１の場をつくり、あなたに関心があるということを伝えていきたい。「楽しさなくして参加なし」「参加なくして未来なし」

助言②　香川県 高松市立国分寺中学校
校長　川上　敬吾 氏

・組織の活性化には場の設定が大切である。組織論として、共通の理念として構成員が主体的に活動できる状態をつくること、ビジョンが共有されていること、構成員が自発的な行動を起こせること、円滑なコミュニケーションが図れること、生産性が高いことが、組織の活性化には大切である。教頭の役割は、ナビゲーター、ファシリテーター、コーディネーターの３つあり、目標の共有、参画意識の醸成と継承、連携の推進がある。フィードバックはよく使うが、ミドル以上ではフィードフォワードで発想していくのも有効であった。大切なのは、主張・質問・最後に合意である。

提言①

教職員個々の資質の向上、組織の専門性の向上に向けて
―「ALL KUKI教育改革プロジェクト」の推進による教育の充実に向けて―

埼玉県久喜市教頭会
久喜市立菖蒲中学校
鬜間　　新

＜協議の柱＞

☆教員の専門性を高め、児童生徒の資質能力の向上を図るための副校長・教頭の役割

1　提言者から提案された成果と課題

・成果

ICTの有効活用に向けた校内組織の整備や学校間の連携により、すべての学校で双方向オンライン授業が可能となった。授業以外での活用についても、ペーパーレス化、連絡・情報共有手段の転換等を行うことで時間の捻出ができた。

・課題

教職員個々が活用の幅を広げ、個別最適化された学習の提供に向けて環境整備を行う必要がある。教職員や児童生徒の実態を把握し、教職員や児童生徒のためにできることを精査する必要がある。児童生徒の教育活動の充実に向けた環境を整えることが教頭の役目と改めて理解し、教職員、学校組織の専門性の向上が不可欠である。

2　グループ協議報告

・ICTの活用について、堪能な教員に役割を振り分け、適材適所で取組の向上につなげている。
・分からないことを言い合える雰囲気になるようコミュニケーションをとり、効果的な取組につなげる意識が大切である。教頭は環境を整備する役目であると自覚する。
・教員個々の特性や能力等を見極め、それぞれの専門性を生かした上で、スキルアップする環境整備を進めていくことが大切である。
・ICT活用の向上の必要性とともに人間関係が希薄にならないことへの配慮も必要。人と人とのつながり、直接話し合うことの大切さも意識し人間関係を深めていくつなぐ役割があることを忘れない。

3　指導助言

助言①　中能登教育事務所
指導課長　布川かほる 氏

・教師の学びの姿も子どもの学びの姿も相似形と言われている。
・ICTのよさを生かし情報整理し環境を整備することは教頭の重要な職務であり授業改善を進めることにもつながる。
・ICTの良さを生かし人とのつながりを整理することも必要である。人という情報に関わる環境を整えることが教員の専門性を高める。
・環境のシステム化を進めることが重要であり、教頭や教員が変わっても変わらないシステムを構築していくことが大切である。
・ICT活用を通して教育の本質に迫り、学習者主体の活動につながるよう推進していく。

助言②　福岡県 福岡市立西高宮小学校
校長　太田　康治 氏

・教頭は空気のような存在。教頭の空気感が職員室を決める。いい空気感を持つ教頭になる。
・偉大な教頭は教員の心に火をつける。指示を待たず自走していく教員を育てたい。教頭として関与性やマネジメントが重要な要素である。
・人材育成は価値、判断基準等の行動基準が変容し行動がよりよくなること。行動とは生み出す成果を最も効果的に創出する工夫を行うこと。そのため教頭としてどう関わるかが重要である。
・教員の相互の「理解と納得」が不可欠であり、共通意思の形成のための準備が必要。組織のキーパーソンを見定める力、戦力分析が重要である。

提言②

教職員の学校参画意識を高める
―教頭が導く、積極的に学校運営に関わる教職員の育成―

福井県大野市教頭会
大野市下庄小学校
松原　大尚

＜協議の柱＞

☆教職員の学校運営参画意識を高めていくための副校長・教頭の関わり

1　提言者から提案された成果と課題

・成果

サーバントリーダーとしての意識が生まれ児童生徒の思いを大切にしながら物事を進めるようになった。若手教職員の自信が高まり会議等でも提案や意見が増えた。教職員同士の活発な意見交流で様々な情報共有ができるようになった。当事者意識を持ってチームとして対応する場面が増えた。

・課題

業務の効率化を進める一方で業務全体の負担感はまだ増加している。ダイナミックなタイムマネジメントが必要である。ミニ研修は講師の選定について学校の課題や教職員の状況を見極め柔軟な対応が必要である。教頭会が中心となり重点項目を共通認識し継続的に実践していく必要がある。

2　グループ協議報告

・中堅教員の育成も課題でサーバントリーダーを意識した工夫が必要だ。若手との組み合わせや横のつながりを意識した配置を工夫している。
・時間削減のためLINEを活用している。グループラインで情報の共有を図っている。
・保護者等のクレーム対応についてグループで様々な取組を話し合うことができた。
・教職員の参画意識のため教頭はリーダシップを育て、やりがいを企てる役目である。教職員を理解し接し方を工夫することが大切である。
・教職員の学校運営参画意識を高めるために、話しやすい関係づくりが大切であると確認した。雑談やさりげない会話から価値づけ自己有用感を向上させ参画意識を高めることが大切である。

3　指導助言

助言①　中能登教育事務所
指導課長　布川かほる 氏

・教職員の多様性を配慮したマネジメントの実現が求められる。心理的安全が確保されれば自己開示や自己表現も生まれ、建設的な対話となる。学校運営のベクトルをそろえることにつながる。教頭の環境づくりが職員の関係づくり、一体感の醸成、学校運営の参画意識へとつながる。
・３M(任せる、見守る、認める)が教頭の役割といえる。個性や強みを把握し試行錯誤しながら評価し次へつなげる。チームリーダーのミッションが明確で一体感のある相互信頼とコミュニケーションが成立していることが大切である。
・一番の肝は「教頭先生の健康と笑顔」

助言②　福岡県 福岡市立西高宮小学校
校長　太田　康治 氏

・教育目標や理念を明示しないと迷う。共通意思の形成が必要であり何のために何をするのか理解して参画意識が高まり、取組の工夫が生まれる。
・脱ヒーロー的なリーダー像は強いリーダーだけではなく弱みを見せながら学び続ける姿である。
・育成すべき資質能力はメタ認知(内部情報を循環する、外部情報から自分を客観視し振り返る)と自己調整力(見通す・実行・振り返る)である。
・参画意識を高めるために、①異質なものに触れ合う場から問題意識や問いが生まれる、②多様な経験から対応力に幅がでる、③力を発揮する場を持たせアウトプットで現実が変わる、という流れを作り出す必要がある。

提言①

教職員の専門性に関する課題の探求と解決に向けた教頭の役割
―若年層教員の効果的な育成に向けて―

宮城県登米市教頭会
登米市立米岡小学校
平塚なおみ

＜協議の柱＞
☆教頭会のネットワークをいかした若年層の育成

1　提言者から提案された成果と課題

・成果
　4～6年目の教員に対しての学校での育成体制が十分でないこと、OJTについて、若年層教員に対する指導や校内研修の時間の確保が難しいと感じている学校が多いことが明らかになった。「宮城県登米市版若年層教員育成の手引き」を作成し、教頭が指導助言を行うときに留意することや、具体的な指導場面を常に追加・編集することができ、指導力向上の一助となった。

・課題
　「育成の手引き」について、教頭会で各校での実践を共有し、効果的な時期・場面を更に検討し手引きに盛り込んでいく必要がある。「育成の手引き」の有効性の検証を行っていく必要がある。

2　グループ協議報告

・教頭会の研修で、人材育成をテーマに講師を招聘するなどの研修を行っている。他の地域でも市町や学校で人材育成を行っている。メンター制度を取り入れている学校がある。メンター、メンティーのペアを作り、授業を見合い、授業力の向上を目指すという取組である。授業のことだけでなく、悩みを相談し合う会を開き、関係づくりをしている学校もあった。
・日頃から学年団等で。ミドルリーダーや若手など様々な年代が交流し、情報交換や児童や生徒を見る視点や風土の共有を行っている。若手主催のミニ研修を開催したり、責任あるポジションにつかせたりする工夫を行っている。
・教頭がなるべく若手の授業を見に行き、声をかけ、困り感を聞いている。指導主事訪問等において、学校間で授業を見合うようにし、若手の授業力向上にいかしている。
・教頭会のネットワークづくりはなかなかできておらず、校内の取組にとどまっている。「手引き」を参考にしたい。様々な部門での名人のような先生の人材リストを作成し、研修を開催してはどうかという意見が出た。

3　指導助言

助言①　金沢市教育委員会 学校指導課
主席指導主事　古川　雄次 氏

・対話が人材育成の秘訣である。日頃からコミュニケーションを取り、子どもの良さをみつけ伝えることで、仕事にやりがいを感じる事ができる。教頭が解説をし、授業の良さを伝えながら授業を見る取組も有効である。
・手引きは、具体的ですばらしい。手引きを作った背景を共有し、これをもとに若手と意見交流すると良い。実際の子供の姿と手引きに書いてあることを照らし合わせ、価値づけすると良い。実践する中で修正していくことが大切である。

助言②　北海道 札幌市立上野幌中学校
校長　安田　仁昭 氏

・教頭会の研究を継続していくことは難しい。次の教頭につなげていくことが大切である。若年層の育成では、自分たちの価値観を押し付け過ぎてはいけない。若手の価値観を承認することも必要。
・個々の先生の強みや弱みを捉え、まず何を伸ばすのか短期的な目標に絞り、徐々に長期的な目標に移して育成していくと良い。
・同僚性は人材育成に大きな影響を与える。強みを生かし、弱みを補い合う関係づくりが大切である。変わろう、学ぼうという姿勢を持ち続けたい。

提言②

教職員の指導力を向上させる教頭の関わり

―人材育成を進めるために―

石川県加賀市教頭会
加賀市立山代中学校
勝木　一弘

＜協議の柱＞

☆ICTを活用した効率的・効果的な人材育成

1　提言者から提案された成果と課題

・成果

ネット上のプラットフォームを活用した「顔の見える」市内包括的な教材研究の取組を加賀市教育総合支援センター教育開発室研究部と加賀市教頭会がコラボレートして行うことができた。また、加賀市学校教育会教育研究部の小中社会科部会と教頭会がコラボレートし、中学校の社会科教員が小学校社会科(地域教材)の指導事例等を作成することができた。それらの取組を行う上で、教頭同士がつながり、具体的な取組を行うことができた。

・課題

本研究を進めていく中で、人材育成と業務改善のバランスの難しさを感じた。教頭同士が「つながり」教員や教材を「つなぐ」「つなげる」という方向性と取組を随時見直しながら、継続して研究を進めていく必要がある。

2　グループ協議報告

・ネット上に指導案を蓄積していく取組は、他の地域でも行っている。どのように分母を増やしていくのかが課題である。どのような工夫を行っているのか。(勝木　加賀市でも同じ課題を抱えているが、教頭と協力して呼びかけをしている。)

・まずICTを使える教師の育成をしていくことが大切である。活用せざるを得ない状況を作っていく必要がある。ICTの実践の研修で指導主事を招聘して学ぶ機会があった。管理職が声をかけ、ベテランも若手もみんなで学ぶ良い機会になった。

・授業では思考ツールを使う場面で効果的に活用されている。使うことが目的にならないようにする。リモート会議等業務改善につながっていることもあるが、実際に会ってつながることも必要である。従来からあるものと、新しいものをうまく組み合わせて活用していくとよいのではないか。

・情報や人をつないでいくことが教頭の役割である。若手だけでなく、ベテランの人ともつながり、それぞれが新たな資質能力を身に付けられると、全体のキャリアアップにつながる。それを教頭会で共有し新たな取組に発展させていきたい。

3　指導助言

助言①　金沢市教育委員会 学校指導課
主席指導主事　古川　雄次 氏

・良い実践に触れること、それを自分の学級に合わせてアレンジを加えてやってみることで学ぶ。教頭が作成者とつなげることはとても良い。話してみることで作成者の思いや熱量が伝わる。

・様々な取組を行う時、「その取組を何のためにしているのか」「やめたらどうなるのか」「やり方を変えたらどうなるのか」という視点で見つめてみるとよい。また、若手がチャレンジし、失敗できる学校であるかを問うてみてほしい。

助言②　北海道 札幌市立上野幌中学校
校長　安田　仁昭 氏

・若手はタイパを好むので、短時間で有効なものが良い。動画配信やウェビナーなどICTの活用が有効である。しかし、参集型とオンライン型の利点に違いがあるように、ICTばかりに頼らないで、目的に適したものを選択しなければならない。

・扇の要は緩いと締まりが悪いように、職員室の雰囲気が締まらなくなり、きついと教職員の心が開かない。教頭(学校の要)が要打ちの技を極め、その扇子で職場に心地よい風を起こしてほしい。

第6分科会　副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題

提言

副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題
―魅力ある副校長・教頭の在り方―
全公教調査から見えてくる現状と課題

全公教　総務・調査部　**上中　研治 氏**
全公教　副会長　**岸川　　孝 氏**

主な提言内容

◇令和４年度
「全国公立学校教頭会調査結果及び分析」
・団体調査及び個人調査の結果と考察

◇令和５年度
「文教施策・文教関連法並びに予算措置に関わる要請について」
・要請文解説

講演

教員のウェルビーイングを高める働き方改革：教員を取り巻く『信頼』への着目

講師　愛媛大学教職大学院教授
露口　健司 氏

主な講演内容

1　「働きやすさ」と「働きがい」の両立に向けて
◇「働きやすさ」と「働きがい」を両立していくカギは、教員を取り巻く信頼関係

2　データで見る教職員の働き方改革
◇「やりがい(ワークエンゲイジメント)」について、教職員は民間企業に比べて高いスコア
◇主観的幸福感を高める働き方改革・働きがい改革が求められている

1　グループ協議報告

＜学校の課題＞
・教育に対するニーズが多すぎる。教育に対する期待は無限にある。勤務時間を削減するために、会議の精選や行事の見直しを図ってきているが、もうすでに限界。
・業務はなかなか減らない。「仕事を減らす、人を増やす、お金を増やす」ことを行政に伝えていく必要がある。適正な人員配置が行われていない現状。さらなる人員増が望ましい。

＜副校長・教頭として＞
・定時退校日を設定したり年休の計画的な取得を促したりしている。
・職員に「働きがい」「やりがい」を感じさせたりつかませたりすることが必要。職員の頑張りを褒め、広め、伝えていく。
・職員に対する副校長・教頭の声かけ一つで仕事に対する「負担感」が「働きがい」や「やりがい」に変わる。日頃から職員間のつながりを大切にし、温かい職場環境づくりに努めることが大切。

＜副校長・教頭としてのウェルビーイング＞
・校長の理解なしに、副校長・教頭の働き方改革なし。校長と連携を図り、連携を深め、信頼関係を構築する。副校長･教頭の職をポジティブに捉え、若手の成長やミドルリーダーの育成に、副校長・教頭自身が「やりがい」や「達成感」を求める。副校長・教頭が職員室に笑顔を届ける役目「Happy Creator」であるべき。

2　指導助言

助言　愛媛大学教職大学院教授　　露口　健司 氏
・対話や交流、協働活動による交換関係を通して「お互い様」を築いていく。対面コミュニケーションが重要。
・学校現場で、何が必要で何が不要なのか、学校ごとによって異なる。見極める基準や時間が重要になってくる。
・「働きやすさ」を高めることで、「働きたい」職場になってくる。職員に「この学校で働きたい！」と思わせることが重要。副校長・教頭として、温かい職場づくりや幸福感を高めるウェルビーイングリーダーシップが求められている。

テーマ

ICT活用を踏まえた、新しい時代の学び（個別最適な学びと協働的な学び）の推進に向けた管理職の役割

ー生徒も教職員も「誰一人、取り残さない」GIGAスクール構想の本質的な実現に向けてー

講演１
上智大学総合人間科学部 教授
奈須　正裕 氏

講演２
石川県加賀市 教育長
島谷　千春 氏

講演１の主な内容

令和の日本型学校教育では、知識をみんなで協働しながら新しい知識を生み出していく。個別最適な学習の考え方は100年前からあり、新しい考え方ではない。ICTは色々な可能性があり、時間軸を変え、空間を拡張する。これまでは電話のような同期型コミュニケーション。そのために必要だったのが学習規律。本来学習に必要なものではない。メールやクラウドは非同期型コミュニケーション。子どもは各自のタイミングで情報を取りに行く。揃うことに意味があるのではない。子ども観の転換。子どもは元々有能な学び手であり、適切な環境と出会えば自ら進んで学ぶことができる。

講演２の主な内容

加賀市では子どもが主役の授業を、教育委員会も一緒になってつくっている。子どもに委ねる授業を、全校組織的にという流れができた。子どもの自己決定の場面、委ねる場面が増えた。先生が机間巡視しながら一人一人への声掛けで、生徒指導や自己肯定感を高めることにつながっている。活動ありきにならないように、つけたい力、抑えるべきゴールを明確にし、学ぶ手段を子どもによってカスタマイズできるような環境設計をしていく。試されているのは大人の想像力、進むのか停滞するのかすべて大人の意思だと思う。

１　グループ協議報告

・長年染み付いてきた子ども観や授業観を手放せないでいる教職員、学校を変えていかなければならないと思う教頭のジレンマ、保護者も授業はみんなが静かに先生の話を聞くものという考え方が染みついている。自由進度に変えていったときに、私たちがその良さを広めて、我慢して子どもに委ねていくかが大事である。

・今回のテーマであるICT、授業改善など、先生方にしてもらうことが増えた。先生方が子どもたちに「しっかり勉強しましょう。」「深く考えていきましょう。」と言っているのだから、先生方にもそういう学ぶ姿勢をもってもらうことが大切だと思う。先生方の意識を高めるためにはどうしたら良いかを検討していきたい。

・自由進度学習をすると、一斉授業より良くなるという思いをもっていかなければならない。新しいことに向かっていく教師集団であるためには、教頭が真っ先に動いていく必要がある。子どもが学びの場を求めて動いていったときに、見取りができる教師がつくことも大事で、教師を目指す若者が増えると良い。

・新しい時代の学びについて、幼児教育での場の設定という取り組みが参考になった。イギリスでは教頭はヘッドティーチャーというお話しがあったが、教頭自ら提案してみたり、若手の提案をうまく価値付けて広げたりする。校長と共に強いリーダーシップを示すという、教頭としての姿勢も大事である。学校の強みや実態に応じて教頭として取り組んでいく。

２　指導助言

助言①　島谷　千春 氏

加賀市でもはじめに出た不安や疑問は他と同じ。最初は不満の声もあったが、一斉授業ではどうしても振り向いてくれない子や、こぼれ落ちている子が気になる先生が率先して授業改善を始めた。成功体験を実践者から伝えてもらうことが説得力が大きくなる。また、先進校視察や勉強会などは複数で行くなど、学校で少なくとも２人で何かをすると広がりを見せたり、最初の一歩を飛び越えたりする心強さが生まれると思う。

助言②　奈須　正裕 氏

ICTや個別、協働というのは、方法論やシステムや道具の改革だが、一番根が深いのは授業がきちんと作れているかどうか。単元の中で教科書をきちんと扱えているかが大事である。教科書をちゃんと使いこなすことができれば、今後どんな改革がきても平気になる。そういうときに教頭が若い先生方と一緒に考え、勉強する。今、基礎をしっかり固めることが教頭や校長の頑張りかと思う。

テーマ

「未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくり」に向けた副校長・教頭の役割

講演１
教育における音楽のチカラ
作曲家・ピアニスト・即興演奏家
北方喜旺丈 氏

講演２
人を伸ばすメンタルコーチング
人財教育家・メンタルコーチ
飯山　晄朗 氏

講演１の主な内容

人生で重要なものは「感受性」である。「感じる」ことからスタートして「考える」ことにつながる。だから、教師には、感動体験により「ポジティブなエネルギーを伝えること」「教えるのではなく引き出し、一緒に創り出すこと」「個の自由な発想を受け入れ、受け止めること」を大切にしてほしい。

教師一人一人の感動体験から、全てが始まる。

講演２の主な内容

人間の脳は、潜在意識から自分が出力したもの（言葉、動作や表情、行動など）を自分の脳に再入力し、脳は口にしたことを実現しようとする。だから、人を喜ばせるプラスの言葉を発することで、思い、心をコントロールできるようになる。

人が伸びる３つの法則は、「ワクワクチャレンジ」「プラスの言葉と動作」そして、「自分より、誰かのために頑張る」ことである。

１　グループ協議報告

講演１

・右脳派（感性）と左脳派（言語系）、それぞれの能力をどう受け止めて指導するかという点で、iPadを上手く使うと、特に右脳派への支援が広がるのでは…と考えた。
・子どもに感動体験を提供する際、地域を生かしていきたい。地域とのマッチングは、教頭の仕事。地域を生かして、経験を増やし、違いが分かる感性豊かな子にしていきたい。
・子どもに寄り添い、よさを認めることや考える力を大切にしていく。子どものやる気を引き出すには、自分で抱え込まず、アドバイスをもらうことも大事。教頭として、人脈を広げていきたい。
・合唱コンクール等では、優秀賞などの評価がある。モチベーションとして大事だと思う。他を蹴落とし、自己顕示欲を満足させるものとならないよう、各々が、最高のものを全力で出す姿を求めるものにしていきたい。

講演２

・職員室に当てはめると、「忙しい、疲れた」のネガティブな言葉がある。先生が言葉や表情、動作を変えることが大事。教頭が演じて見せていくようにしたい。
・褒めることを意識しているが、重要であると再認識した。苦手だと思うと、それが潜在意識になってしまう。子どもを褒めること、職員を褒めること、表情を伴って褒めることを意識し見直したい。

２　総括

飯山　晄朗　氏より

教頭先生方は、子どもを褒めることは慣れていると思う。大人（職員）に対しての方が難しいのではないか。リーダーが雰囲気をつくることが大事。笑顔で、言葉を伴って、徹底的に行っていく。リーダーの覚悟が問われているのである。

しかし、どうしても伝わらなかった時、自分を責める必要はない。「ミスマッチだった。」と切り替える。クリアリングにより、自分（教頭）を守ることも大切である。

高知大会紹介

来年度の「第 66 回全国公立学校教頭会研究大会」は、令和 6 年 7 月 31 日（水）～ 8 月 1 日（木）の 2 日間、高知県高知市で開催いたします。

高知県は、南は黒潮流れる太平洋に面し、北は四国山地に囲まれた自然豊かな温暖な土地柄です。その豊かな自然を生かした新鮮な海産物や農作物の味は格別です。また、高知県は、坂本龍馬をはじめ、広い世界に目を向け、新しい時代を切り拓く思想をもった志高い郷土の偉人を多く輩出しており、国民の自由と権利を求めた自由民権運動発祥の地でもあります。

現在、少子高齢化が進み、全国的な子供の数の減少に伴い、学校の統廃合が進む一方で、教育のグローバル化や ICT 教育の推進等、これまでにない学校教育が求められております。予測困難で複雑な社会となりうる未来に生きる子供たちが、自ら課題を見出し、その解決に向けて適切に判断して行動する力が必要となってきます。そのため学校現場では、様々な学習や体験を通して、他と関わり合いながら自ら考える力を育てていかなければなりません。全ての子供たちが平等に学ぶことができる学校には、それぞれ異なった家庭や地域の実情が存在し、容易に達成できない課題も立ちはだかっております。これらの課題を乗り越えていくためには、これからは学校だけでなく、広く地域の人材や専門的知見を有する様々な立場の方と協働しながら学校教育を推進していかなければなりません。子供たちのために、副校長・教頭がチーム学校の柱としてリーダーシップを発揮しながら、その重責を果たしていくことになりますが、働き方改革が問われている学校現場では、思うような結果が伴わない場合もあります。

それらの課題解決に向けて、高知大会では、全国の皆様の実践から学び、熱い志を共有していく中で、学校現場ですぐにでも生かすことができる新たな学びの場となる大会にしていきたいと考えております。そのために、2 年目となる第 13 期の主題のもと、「夢と志をもち、協働して未来を創る子どもを育成するチーム学校づくりの推進」というサブテーマを掲げます。皆さん、共に学んでまいりましょう。

全国の皆様と南国土佐の高知でお会いできることを楽しみにしております。

実行委員長　大坪　顕彦

石川大会を振り返って

第65回全国公立学校教頭会研究大会が、８月３日、４日の２日間、石川県金沢市において盛大に開催できましたことを、心より御礼申し上げます。

本大会を開催するにあたり、ご祝辞やご指導・ご助言を賜りました文部科学省、石川県教育委員会、金沢市教育委員会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会をはじめとする関係諸機関、諸団体の皆様、研究実践報告を頂きました提言者の皆様及び、各ブロック単位の教頭会の皆様、大会運営に格別のご支援・ご協力を頂きました全国公立学校教頭会役員会・専門部会・事務局の皆様等多くの方々にご尽力を頂き、心より深く感謝申し上げます。

大会１日目に行われましたシンポジウムでは、國學院大學教授の田村学様をコーディネーターに迎え、シンポジストには、加賀屋グループ女将の長谷川明子様、学校法人湘南学園学園長の住田昌治様、加賀市教育委員会教育長の島谷千春様にご登壇頂きました。石川大会のサブテーマである「ふるさとに誇りをもち　未来を切り拓く心豊かな人づくりを目指す　これからの学校運営の推進」をもとに、そこには欠かせない「教師力の育成」「人材育成と組織の在り方」「働き方改革」という三つの視点を織り交ぜてお話頂きました。シンポジストの方々から語られる内容は大変興味深く、自らの経験と重ねながら聞き入ってしまいました。ここでお話頂いた内容を、私達、副校長・教頭がしっかりと受け止め、次へつないでいきたいと思います。

シンポジウムに続き行われた記念講演では、金沢21世紀美術館館長の長谷川祐子様により、「豊かな感性を育む場所をつくる」といった視点でご講演を頂きました。学校が果たす役割と美術館が果たす役割との共通点から、「未来を切り拓く心豊かな人づくり」へのヒントを頂けたように感じました。

２日目の分科会では、オンライン型と参集型を融合した全国初の「ハイブリット形式」となりました。オンラインで参加されている方と参集された方がどのように交流すれば協議が深まるか、何度も検討を重ねて参りました。そうした中、多くの時間を割いて作って頂いた提言をもとに、活発な協議をして頂きましたことに改めて感謝申し上げます。提言者の皆様、指導助言の先生方、分科会の運営にあたって頂いた皆様、司会・記録を務めて頂いた皆様、本当に有り難うございました。大会を通して感じたことや得たものを、皆様によって全国へ広げて頂ければ幸いです。

私たち石川大会実行委員会は、この大会の開催にあたり、教頭としての日々の業務を行いながら、大会の開催方法を巡って、何度も話し合いを重ねて参りました。振り返れば、そうした時間の一つ一つが、私たちの貴重な財産となったように思われます。そして、全国から参加して頂いた３,200名の方々と同じ時間を過ごせたことを大きな喜びと感じております。

この後、私たちはしっかりと大会を振り返り、成果と課題をまとめ、来年度の高知大会につないでいきたいと思っています。

皆様、２日間、本当に有り難うございました。

石川大会実行委員会　委員長　柳瀬　道雄

会章のいわれ

円は教頭会のまとまり、協力、発展
教は教育の教と教頭の教
８本の線は全国８ブロックを意味し、
中央の段ちがいのアクセントは
教頭の自覚を促すことを希っている。

Designed by
元茨城県真壁町桜川中学校教頭
塚本　武治　氏

第 65 回　全国公立学校教頭会研究大会
第 51 回　東海・北陸地区公立学校教頭会研究大会
第 56 回　石川県公立小中学校教頭会研究大会

石 川 大 会 集 録

令和５年11月30日発行

編集人兼発行人　全国公立学校教頭会会長　吉原　勇
石川大会実行委員会委員長　柳瀬　道雄

発　行　全国公立学校教頭会
〒105-0002
東京都港区愛宕１丁目６番７号愛宕山弁護士ビル４F
TEL (03)3436-4868 ～ 9　Fax (03)5425-2788

印 刷 所　田中昭文堂印刷株式会社
〒920-0377
石川県金沢市打木町東1448番地
TEL (076)269-7788㈹　Fax (076)269-7311